

まえがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010093

まえがき

楊 海英

本書は2016年11月6日に開かれた国際シンポジウム「中国文化大革命研究の新資料・新方法・新知見—50周年からの再スタート」に寄せられた論文集である。私がつとめる静岡大学人文社会科学部アジア研究センターと金野純准教授の学習院女子大学国際学研究所が共同で開催し、全体の運営には神戸大学国際文化研究科・谷川真一准教授の力を借りた。いわば、われわれ三人がともに力を出し合って、開きおこなった国際学術会議である。今回の国際シンポジウムを成功させるため、われわれ三人は複数回にわたって参集し、パネラーの招聘と会議のテーマについて議論を重ねた。文化大革命（以下、文革と略す）発動50周年を記念しようと世界各地で研究会やシンポジウムが招集されたが、われわれ三人もまたそのような場を共有したこともあり、ディスカッションを重ね、時期も年末にさしかかったことを意識して、本書のタイトルとなるテーマに決定したのである（写真1）。



写真1 シンポジウムのパネラーたち。前列右からウォルダー、宋永毅、蘇陽、谷川真一。後列右から金野純、大野旭=楊海英、チョロモン、張中復

文革の大きな特徴の一つは暴力である。しかし、その暴力の原因と実態、そして善後処理は決して明らかになっていない。ウォルダー教授は20年近くの歳月をかけて、本書の編者の一人でもある谷川准教授もかつて加わったプロジェクトで文革の犠牲者の数を特定しようと努力した。およそ2,214もの地方史誌を収集して分析した結果、推定約110～160万人が殺害されたとの結論が導きだされた。その大半は、1968年春以降に各地で革命委員会が成立した後の時期に集中している。暴力の推進者は従来から喧伝されてきた造反派ではなく、当局者だった事実もあきらかになった。アプローチの手法こそ異なるものの、宋永毅教授（写真2）が長年にわたって発



写真2 シンポジウムで報告する宋永毅教授

掘し、編集して公開した機密档案類もまた暴力の発動者が政府であったことが立証されている。省・自治区単位で見ると、広西チワン族自治区と内モンゴル自治区の犠牲者数がもっと多い事実も浮かびあがってきた。そして、暴力の深刻さをコミュニティや民族構成別に見ていくと、中国南部の場合、少数民族が多数を占める地域では相対的に温和で、漢族が多い県では虐殺と性犯罪が多かった事実もまた、蘇陽の研究と報告で明らかになっている。国家指導者によるスポンサーと、地方で機能していた「虐殺の共同体」との間に存在する政治プロセスの究明や、県・人民公社レベルでの指導者たちの役割についての研究が不可欠である、と谷川准教授は呼びかけている。

文革は当初から中国一国内に収まる政治運動ではなかった。中国が自国の一部と主張する台湾・中華民国の場合、逸早く北京当局の「反伝統」性に気づき、そのうえで「中華文化の復興」を反共利用した。「中華文化の復興」は国民党こそ伝統の守り手であるとの側面を強調したかったものの、逆に地元の先住民との間に亀裂を

もたらし、今日までにつづく台湾内部の思想的分裂につながる、と張中復教授は報告している。おりしも、年末に合衆国でトランプ氏が大統領に当選したことを受けて、私はいわゆる現在のポピュリズムと毛沢東流大衆運動と比較して考えた。

当事者の中国もそれなりに文革を清算しようとした。東京大学大学院で学ぶチョロモン氏は一人のモンゴル人知識人ウランバガナが社会主義中国で「少数民族作家」として「育成」され、そしてモンゴル人ジェノサイドのスケープゴートにされていくプロセスを詳述している。操作された官制のデータを緻密に分析すれば、犠牲者数の規模をある程度推定できる。プロパガンダの道具である作家とその作品類について検討すれば、文革の複雑さと根深さがあらためて浮き彫りになる。シンポジウムには多数の市民が参加し、熱い議論を交わした（写真3）。



写真3 シンポジウムのパネラーたちと一部の参加者たち

発掘された新資料に基づく新方法と新知見は個々の論文内に凝集されている。文革は10年間もつづいた以上、「記念」や「検証」も一年間で終わるものではなく、少なくとも今後10年間かけて進めていかなければならない、と編者3人と参会者たちは共有するに至ったのである。

最後に、今回の国際シンポジウムの開催にあたり、学習院女子大学国際学研究所と静岡大学人文学部から多大な援助を受けた。記して関係各位に深謝申し上げる。